

AFRC



NEWS

URL:<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.htm>

Active Fault Research Center

CONTENTS

活断層研究センター平成15年度
研究課題および担当者

フィールド・トレンチ情報

学会，研究集会

新聞，テレビ報道

活断層研究センターセミナー

招待講演，セミナー

対外活動報告（2003年3月）

第2回活断層研究センター
研究発表会開催のお知らせ



活断層研究センター平成15年度研究課題および担当者

2003. 4. 1 現在

1. 全国主要活断層等の研究

責任者：下川浩一

- 1-1 邑知渦断層帯 下川浩一, 水野清秀, 吾妻 崇, 杉山雄一, 堤 浩之 (京都大)
- 1-2 黒松内低地断層帯 吾妻 崇, 下川浩一, 寒川 旭, 杉山雄一, 桑原拓一郎, 伏島祐一郎, 奥村晃史 (広島大), 町田洋 (元東京都立大), 後藤秀昭 (福島大)
- 1-3 牛首断層 宮下由香里, 吉岡敏和, 桑原拓一郎, 斎藤 勝, 苅谷愛彦 (千葉大)
- 1-4 境峠・神谷断層帯 吉岡敏和, 水野清秀, 宍倉正展, 石山達也
- 1-5 大原活断層帯 水野清秀, 小松原 琢 (地球科学情報研究部門), 下川浩一, 佃 栄吉, 伏島祐一郎, 金折裕司 (山口大)
- 1-6 長町一利府線断層帯 栗田泰夫, 杉山雄一, 下川浩一, 石山達也, 斎藤 勝
- 1-7 深谷一綾瀬川断層帯 水野清秀, 杉山雄一, 石山達也, 須貝俊彦, 中里裕臣 (農業工学研), 八戸昭一 (埼玉県環境科学国際センター)
- 1-8 活断層調査のまとめ 下川浩一, 水野清秀, 吾妻 崇, 宮下由香里, 寒川 旭, 吉岡敏和, 宍倉正展, 遠田晋次, 杉山雄一, 佃 栄吉, 小松原 琢 (地球科学情報研究部門), 七山 太 (海洋資源環境研究部門), 桑原拓一郎, 伏島祐一郎, 斎藤 勝, 竹村恵二 (京都大), 北田奈緒子 (地域地盤環境研), 苅谷愛彦 (千葉大), 井村隆介 (鹿児島大), 小林健太 (新潟大)
- 1-9 全国主要活断層の評価 栗田泰夫, 吉岡敏和, 下川浩一, 杉山雄一

2. 活断層データベース, 活構造図等の研究

責任者：吉岡敏和

- 2-1 活断層データベースの整備 吉岡敏和, 栗田泰夫, 下川浩一, 杉山雄一, 吾妻 崇, 宮下由香里, 水野清秀, 宍倉正展, 石山達也, 伏島祐一郎, 桑原拓一郎
- 2-2 伊那谷断層帯ストリップマップの編纂 松島信幸 (飯田市美術博物館), 池田安隆 (東京大)
- 2-3 活構造図「新潟」の編纂 小松原 琢 (地球科学情報研究部門), 栗田泰夫, 吾妻 崇, 宮下由香里,

吉岡敏和, 関口春子, 駒澤正夫 (地球科学情報研究部門)

2-4 活構造図「秋田」の編纂 吾妻 崇, 栗田泰夫, 小松原 琢 (地球科学情報研究部門), 桑原拓一郎, 堀川晴央, 駒澤正夫 (地球科学情報研究部門)

2-5 活構造図「金沢」の編纂 杉山雄一, 佃 栄吉, 関口春子, 栗田泰夫, 吉岡敏和, 吾妻 崇, 寒川 旭, 奥村晃史 (広島大), 駒澤正夫 (地球科学情報研究部門)

2-6 地震発生危険度マップの編纂 吉岡敏和, 下川浩一, 栗田泰夫, 杉山雄一

2-7 活断層・古地震研究報告の編集・発行 杉山雄一, 下川浩一, 栗田泰夫, 佐竹健治, 吉岡敏和, 衣笠善博 (東京工業大), 山崎晴雄 (東京都立大), 須貝俊彦 (東京大)

2-8 センターニュースの編集・発行 吉岡敏和

2-9 ホームページの管理運営 吉岡敏和, 宮下由香里, 堀川晴央, 遠田晋次

3. 活断層系のセグメンテーションの研究

責任者：栗田泰夫

3-1 北アナトリア断層系の研究 栗田泰夫, 遠田晋次, 吉岡敏和, 岡村 眞 (高知大), 松岡裕美 (高知大), 近藤久雄 (広島大), 奥村晃史 (広島大), 堤 浩之 (京都大), 須貝俊彦 (東京大), 奥野 充 (福岡大)

3-2 国際ワークショップの開催 栗田泰夫, 遠田晋次, 佃 栄吉, 吉岡敏和, 関口春子, 奥村晃史 (広島大), 近藤久雄 (広島大), 堤 浩之 (京都大), 岡村 眞 (高知大), 須貝俊彦 (東京大)

3-3 断層相互作用の研究 遠田晋次, 栗田泰夫, 吉岡敏和, 加瀬祐子

4. 海溝型地震の履歴と被害予測の研究

責任者：佐竹健治

4-1 千島海溝の古地震, 津波痕跡調査と被害予測図 佐竹健治, 下川浩一, 七山 太, 澤井祐紀

4-2 相模トラフ (房総半島) の古地震・津波痕跡調査 宍倉正展, 栗田泰夫, 佐竹健治, 下川浩一, 鎌滝孝信, 山崎晴雄 (東京都立大)

4-3 南海トラフの古地震・津波痕跡調査 佐竹健治, 栗田泰夫, 宍倉正展, 佃 栄吉, 下川浩一, 寒川 旭, 澤井祐紀, 鎌滝孝信, 高田圭太 (復建調査設計)

4-4 南米チリ太平洋岸の古地震・津波痕跡調査 佐竹健治, 宍倉正展, 澤井祐紀, 鎌滝孝信

5. 地震被害予測の高度化の研究

責任者：佐竹健治

5-1 大阪平野の地震被害予測図の作成 佐竹健治，杉山雄一，水野清秀，堀川晴央，関口春子，石山達也，加瀬祐子，横田 裕（阪神コンサルタンツ）

5-2 地震災害軽減のための強震動予測マスターモデルに関する研究（科学技術振興調整費） 杉山雄一，関口春子，堀川晴央，石山達也，加瀬祐子

5-3 大都市圏の地質災害軽減・環境保全を目的とした地質学的総合研究（産総研分野別重点課題） 関口春子，堀川晴央，佐竹健治，水野清秀，下川浩一，杉山雄一

6. その他の研究

6-1 中国大陸活断層の研究（中国地震局と連携） 何 宏林，傅 碧宏，佃 栄吉

6-2 関東地域の地震確率評価研究（米国地質調査所，Swiss Re との共同研究） 遠田晋次，佐竹健治

6-3 原子力安全基盤調査研究（原子力安全保安院委託研究） 杉山雄一，吾妻 崇，下川浩一，伏島祐一郎

フィールド・トレンチ情報

2月20日-3月4日

ニュージーランドにおける活断層調査及び活断層DB作業

吾妻 崇

ニュージーランドの Institute of Geological and Nuclear Science Ltd. を訪問し、現地の活断層調査の状況を視察するとともにニュージーランドの活断層に関する情報を収集した。なお上記機関は旧ニュージーランド地質調査所であり、組織改変後に規模が縮小され、活断層調査に関しては現在約20名の研究者が携わっている。

南半球ではこの時期がフィールド調査のシーズンとのことでトレンチ現場を視察することを期待していたが願いかなわず、代わりに今年4月に掘削を行う地点での予備調査に同行させて頂いた。案内者は Robert Langridge 氏と Dougal Townsend 氏で、ウェリントンの北東約100kmのところの Mokonui 断層が調査対象の活断層である。この断層は Wellington 断層の東に近接して並走する Wairarapa 断層から東へ分岐した枝断層で、北西上がりの正断層と考えられている。これと同様な枝断層に、Materton 断層、Carterton 断層があり、それら、ある

いは Wairarapa 断層そのものについては既にトレンチ調査が実施されているが、Mokonui 断層については今回が初めてのトレンチ掘削調査であるという。ニュージーランドの土地の多くが広大な牧草地であるが、現地も多聞にもれず羊を放牧している牧草地であった。地権者に会いに行き、調査の説明をし、了解を得た。このプロセスが一連の調査の中でもっとも手間がかかり、かつ重要なのは日本でもニュージーランドでも変わりはないらしい。この日は候補地2ヶ所の地権者に了解を得て、ハンドオーガリングによる簡易地質調査を実施した。1地点目は最終氷期頃に形成された段丘面を切る場所であり、断層崖の比高は約15mである。地図上には崖の麓に小さな池があるように示されていたが、行った時には水は干上がっていた。この場所で、ハンドオーガリングを行ったが、予想に反して深さ50cm程度で礫層にあたっしまいそれ以上掘削することはできなかった。断層崖上には小規模なスランピングが生じており、ところどころに基盤が顔を出していた。そこでは未固結な砂礫から堆積岩が断層の低下側に向かって約30度傾斜しているのが確認された。しかしながらこの場所は、断層崖の規模がトレンチ調査をするには大きすぎること、スランピングの崩落物による埋積の影響が大きいと考えられることから、あまりトレンチ調査には適さないと判断された。2地点目は500m程南で、この活断層がより低位の段丘を横切るところで簡易調査を実施した。断層崖の比高は約5mで、崖の高さと比して変形帯の幅が広く、撓曲崖のようにもみえる。まずこの崖の低下側と斜面上の2ヶ所でハンドオーガリングを行った。崖付近はやや人工的に改変されている可能性があったが、地表下50cm以深はオリジナルの堆積物に思われる。低下側で50cm付近から砂礫層にあつたのに対し、隆起側で細粒なシルトや木片を含む泥炭が出てきた。さらに両地点の間とさらに隆起側で掘削を行ったがいずれも砂礫がちであり、4ヶ所の層序対比はとても困難なものと思われた。この場所で4月にトレンチ掘削調査を行なうことになったが、どのような結果がでるのか今から興味深い。

Russ Van Dissen 氏にニュージーランドの活断層データベースについて尋ねたところ、ニュージーランドの活断層データベースを担当している研究者3人を紹介してくれた。彼らにメールを送ったところ、そのなかの1人 Peter Wood とコンタクトが取れ、この日の午後にミーティングを行うことになった。ミーティングには Wood 氏のほか、Richard Jongens 氏と Biljana Lukovic 氏が同席してくれた。Wood 氏と Lukovic 氏はほかのミーティング

があるとのことで少し急ぎ足ではあったが、プロジェクタを使ってGNSで行っているデータベース作業の概要を説明してくれた。GNSには活断層のほかにもデータベースが作られており、基本的な形式についてはそれに基いている。データはARC/INFOおよびMS-ACCESSを用いて作成されている。活断層に関するデータは階層化されており、Fault・Section・Trace・Siteに区分される。上位階層のデータのうち下位のデータに基いて算出されているものは、下位のデータが更新されれば同時に更新されるように、リンクされている。地図情報から活断層を選択しクリックすると、別ウインドウでそれに関するデータが表示される。データウインドウは左右2つのフレームからなり、左に出典元のリストがありそれを選択すると、右のフレームに断層長や活動履歴などの情報が示されるようになっている。まだ作業途中段階であり、外部向けには公表されていない。2年後を目標に作業を進めているとのことである。

最近のトレンチ調査に関するレポートは論文となっているもののほかに、GNSが受けている報告書が多数あった。これらの報告書はニュージーランドの地震調査委員会のようなところに申請して行ったプロジェクトの結果と、GNSが受注して行った調査の報告とがあり、後者はプライベートなものであるが、前者はオープンなファイルとなっている。これらの資料から断層の活動履歴に関するデータを収集していく作業を進めていたが、これについては時間が足りず、滞在中には完了していない。トレンチ現場でのイベント解釈のディスカッションも含め、データの収集作業を継続的に行っていきたいと考えている。



Mokonui 断層の断層崖

3月11日

邑知潟断層帯ボーリングコアに基づく地質構造の検討

水野清秀

邑知潟断層帯南部で実施した群列ボーリングコアの観察を共同研究機関である北陸電力株式会社の担当者で行い、地質構造の検討を行った。前回の検討会の後に得られた年代測定値、火山灰対比結果などを基に、各ボーリング地点間の地層の対比を行い、急傾斜帯や地層の不連続などに注目して、地質構造を推定した。また、追加の年代測定や花粉分析のためのサンプリングを併せて行った。

3月18日

黒松内低地断層帯長万部地区で掘削したボーリングコアの観察会

桑原拓一郎, 吾妻 崇

長万部町富野において掘削した3本のボーリングコアの観察を行なった。泥炭、泥、砂、礫がそれぞれ採取されたが、これらの層序区分、対比、堆積環境などの概略を検討した。また時代対比を目的として、火山灰と泥炭のいくつかの層準でサンプリングを行なった。今後、これらサンプルをまず分析してからより詳細にコアを検討して、長万部周辺の地殻変動について考察していく予定である。



採取した堆積物と語り合う吾妻

学会, 研究集会

2月5日 - 6日

大大特：動的断層モデルと強震動セミナー

堀川晴央, 加瀬祐子, 関口春子

このセミナーは、今年度から始まった大都市大震災軽減化特別プロジェクトの「サブテーマ3. 断層モデル等の構築」の2つの研究項目、(3)「動的モデルパラメータの研究」と(7)「強震動予測高精度化のための震源モデル・堆積盆地構造モデルの構築に関する研究」が共同で開いたものである。断層運動の物理を解明しようとしている研究者や、それをどのように地震動予測に導入すべきかを考えている研究者が集まり、研究の現状と将来の方向性を話し合った。センターからは、堀川が広帯域の震源像を解析する手法の開発についての構想を、加瀬が上町断層系、生駒断層系について行っている数値シミュレーションによる動的破壊シナリオについて、関口がその動的破壊シナリオによる地震動シミュレーション結果と現状の問題点について発表した。

3月17日 - 18日

「地震災害軽減のための強震動予測マスターモデルに関する研究」第2回シンポジウム

杉山雄一, 関口春子, 堀川晴央

3月17, 18日, 文部科学省科学技術振興調整費プロジェクト「地震災害軽減のための強震動予測マスターモデルに関する研究(代表: 入倉孝次郎教授)」の第2回シンポジウムが建築会館(東京都港区)で行われた。センターからは、杉山が活断層情報と不均質震源特性に関する今年度の成果を発表した。プロジェクト内の各研究課題の発表だけでなく、関連する研究を行っているプロジェクト外の研究者の発表も数多くあり、同様の目的に対するさまざまな考え方やアプローチを比較できた。動的破壊シミュレーションに関する研究発表や、活断層形状と破壊の進行方向に関する研究発表で特に議論が盛り上がった。地震動予測に破壊の物理を考慮していきたいという考え方が高まってきていることを反映しているのかもしれない。

3月29日

日本地理学会企画専門委員会主催公開シンポジウム「災害ハザードマップと地理学 - なぜ今ハザードマップか?」

桑原拓一郎, 何 宏林, 佐竹健治

2003年度春季学術大会に合わせて、上記の公開シンポジウムが開催された。火山災害や洪水および地震に関するハザードマップについて、その歴史や概

念および利用の実態が実例を交えて紹介された。その一方で、今後ハザードマップに多用されるであろうGISやGPSといった最先端の技術についても詳しく解説された。また質疑では危険地域の法規制についての問題も真剣に取り上げられるなど、災害ハザードマップが様々な学問と関連していることを改めて感じさせられた。

3月29日 - 30日

日本地理学会春季学術大会

穴倉正展・吾妻 崇・桑原拓一郎

今年の日本地理学会春季学術大会は、桜咲く3月29-30日に東京大学本郷キャンパスにて行われた。一般研究発表では、活断層・古地震関係の発表もいくつかあり、国内外の断層の活動性について論じられていた。特に松多氏による糸静線中部における変動地形とスリップパーティショニングの関係は興味深い内容であった。そのほか、テフラの層位と段丘編年などに関する発表があり、従来とは異なる見解がいくつか示されていた。

新聞, テレビ報道

ニューススクランブル「月刊地震ファイル」

2003年3月17日 読売テレビ 18:20 ~

寒川 旭

週日の夕方6:20から7:00までのニューススクランブルでは、「月刊地震ファイル」として、毎月一回、地震に関する知識を普及する企画を続けている。今回は、大阪平野周辺に分布する大きな活断層である有馬一高槻構造線活断層系・生駒断層系・上町断層系・中央構造線活断層系について、最近の活動履歴について特集した。この中で、トレンチ調査や遺跡調査からわかる、それぞれの活動履歴について解説した。

南海地震に備える「研究室からのメッセージ」

2003年3月20日 毎日新聞 朝刊

寒川 旭

毎日新聞社大阪本社では「南海地震に備える」というタイトルで、毎月1回、研究者が交代で連載を行っている。今回は11回目の「歴史上：噴砂跡から前例を検証」として寄稿した。まず、江戸時代以降に発生した南海地震の年代や液状化現象についての古文書を紹介し、考古学の発掘調査で見つかった液状化の痕跡で、古文書を検証できることを示した。この中で、液状化現象発生のメカニズムを詳しく説明している。

活断層研究センターセミナー

3月7日

活断層の3次元的形状評価の必要性—活断層評価の高度化を目指して：三方・花折断層帯，琵琶湖西岸断層帯を例として

佃 栄吉

活断層の将来の活動性・地震発生プロセスを議論するとき、断層の形状、とくに形状を的確に評価することが重要であろう。現在の地震調査委員会での評価では、まだ3次元的形状評価にはほとんど踏み込まれていない。情報が十分でないことにもよるが、強震動予測へ渡す情報としてはある程度踏み込んだ判断をする必要に迫られている。セミナーでは三方・花折断層帯，琵琶湖西岸断層帯を例にとり、3次元的形状評価の必要性を検討した。三方断層帯と花折断層帯は松田（1990）では別々の起震断層とされ、推本では一括して主要活断層として評価が行われている。いずれも地表部での断層分布から決められている。花折断層帯と琵琶湖西岸断層帯の関係はきわめて不思議である。横ずれ断層と逆断層がほとんど同じ走向で並走している。それぞれの断層運動から想定される最大圧縮主応力の方向は広域応力場とは対応しないで、二つの方向を合わせると広域応力場によく一致する。琵琶湖西岸断層帯の西傾斜構造を深部まで延長すると垂直に近い花折断層に地震発生層下底付近で収斂する可能性が高い。これらのことは花折断層帯と琵琶湖西岸断層帯とは構造的に親近性が高く、Slip partitioningをしていることを示していると判断させる。このことは地表では離れている二つの断層帯について、震源域の形状まで含め3次元的に注意深くその関連を検討する必要があることを示している。この例は、3次元的な断層形状の評価を進めることが活断層評価の高度化に貢献する可能性がある、ことを示している。

3月14日

チリ中南部における津波堆積物・地殻変動の予備調査報告

宍倉正展

1960年チリ地震の津波・地殻変動および古地震に関する研究プロジェクトが、チリの大学を中心とした研究チームとUSGS、活断層研究センターとの共同研究として今年から3年計画でスタートした。このプロジェクトのおもな目的は、堆積物の観察や

聞き取り調査に基づくチリ地震における津波の浸水域の推定、および地震時・地震後の地殻変動量を明らかにすること、また地形地質から古地震の履歴を読み取り、再来間隔を推定することである。当センターは2004年からの本格参加となるが、その予備調査として、宍倉が2月9～23日の期間、2003年調査に参加した。調査地域は1960年地震の震源域のほぼ中心にあるチリ南部のマウジン周辺である。本地域は地震時に最も大きな津波被害を被っており、また、およそ2mのコサイスマックな沈降を記録している。今回の調査ではおもに塩性湿地におけるトレンチでの津波堆積物の観察を行い、またポストサイスマックな隆起の測定や離水浜堤の調査なども行った。その結果、トレンチで1960年の津波堆積物より前に少なくとも3層のイベント堆積物を確認した。また、地震後に現在まで場所により、およそ0.75m隆起していることが明らかになった。本セミナーでは今回の調査の概要と今後の展望について紹介した。

3月28日

日本海東縁の断層関連褶曲とスラストシステム

岡村行信（海洋資源環境研究部門）

日本海東縁には様々な波長や形態の褶曲構造や隆起帯が形成されている。これらが断層関連褶曲であると考えることによって、上部地殻の逆断層だけでなく、下部地殻の変形に伴う隆起帯の分布も推定できる可能性がある。それらの分布に基づいて、日本海東縁のスラストシステムについて議論した。

招待講演，セミナー

3月25日

関西地震観測研究協議会 入力地震動検討分科会

加瀬祐子

関西地震観測研究協議会の入力地震動検討分科会において、動力的震源モデルを用いた地震破壊シナリオの作成について講演した。この分科会は、大阪工業大学の堀家先生を中心とした建築物の耐震設計に用いる入力地震動作成のための勉強会（演習も含まれる）であり、参加者は、土木・建築・応用地質分野がほとんどである。動力的震源モデルについての基礎的な質問から、実際に必要とされている情報など、地震動予測地図作成の上で参考になる意見を聞くことができた。

活断層研究センター活動報告（2003年3月）

■ 対外活動（外部委員会等）

3月3日

平成14年度第4回北海道活断層調査委員会（下川出席 / 札幌）

十勝平野断層帯、富良野断層帯、及び標津断層帯の平成14年度調査結果と平成15年度調査計画について検討を行った。

3月9日

平成14年度第5回大分県地域活断層調査研究委員会（水野出席 / 大分）

別府-万年山断層帯のトレンチ調査、反射法探査結果などの報告を受け、追加調査、まとめ方、来年度調査予定などについて議論した。

3月10日

海洋情報部津波防災情報図検討会（佐竹出席 / 東京）

第2回津波防災情報図検討会に出席した。

主な議題は、「東海地震を想定した津波防災情報図の成果の評価」、「今後の津波シミュレーションについて」等。

3月12日

第109回地震調査委員会（佃出席 / 東京）

2003年2月の地震活動等について検討した。 <http://www.jishin.go.jp/main/index.html> 参照

3月13日

第9回活断層評価資料検討WG（振興会）（杉山出席 / 東京）

栃木県の関谷断層と岐阜県の長良川上流断層帯の評価用資料の内容について、改善すべき点、追加すべき事項などをコメントした。

3月11日

第1回東南海・南海地震を対象とした調査観測の強化に関する打ち合わせ（古地震・古津波調査）（杉山出席 / 東京）

標記観測強化の一環として、古地震・古津波の分野において、具体的に優先して実施すべき研究調査の内容について議論した。

3月14日

地震調査委員会長期評価部会第36回西日本活断層分科会（下川出席 / 東京）

3月19日

第3回京都府活断層調査委員会（吉岡出席 / 京都）

今年度の三峠-京都西山断層帯の調査結果のまとめと来年度の調査計画について検討した。

3月19日

地震調査委員会長期評価部会海溝型分科会（第22回）（佐竹出席 / 東京）

標記委員会が、長期評価部会と合同で開催された。

主に、日本海東縁の地震活動の長期評価について議論した。

3月19日

第76回長期評価部会（杉山出席 / 東京）

日本海東縁で発生する地震の長期評価、琵琶湖西岸から若狭湾岸に至る地域の活断層の評価、北日本の確率論的地震動予測地図などについて議論した。

3月20日

平成14年度第5回大阪平野地下構造調査委員会（水野出席 / 大阪）

本年度実施した、反射法探査の解析結果について議論した。また今後の課題、来年度の計画、調査結果の説明会などについて話し合った。

3月25日

第2回兵庫県地域活断層調査委員会（寒川出席 / 神戸）

今年度実施した六甲・淡路断層帯における、塩尾寺断層の反射法探査とボーリング調査、六甲断層のトレンチ調査の結果について検討した。

3月25日

平成14年度第7回神奈川県地域活断層調査委員会（水野出席 / 東京）

国府津-松田断層の調査結果の解釈について議論した。また報告書にまとめる項目・内容などの確認を行った。

3月27日

第10回活断層評価資料検討WG（杉山出席 / 東京）

屏風山・恵那山断層帯の評価資料について検討した。

3月27日

第7回三重県地域活断層調査委員会（寒川出席 / 名古屋）

三重県地域活断層調査委員会に出席して、平成14年度に実施した鈴鹿東縁断層帯の調査資料をもとにして話し合った。おもに、トレンチ調査とこれに関連したボーリング調査・地形断面調査について、最新活動の時期や変位量などを検討した。

3月28日

地震調査委員会長期評価部会第37回中日本活断層分科会（吉岡出席 / 東京）

2003.3.31 発行

編集・発行 独立行政法人 産業技術総合研究所
活断層研究センター

編集担当 黒坂朗子

〒305-8567

茨城県つくば市東1-1-1 中央第7サイト

TEL:029-861-3691 FAX:029-861-3803

URL <http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>

「第2回活断層研究センター研究発表会」開催のお知らせ

日時：平成15年4月18日（金）午前10時～午後5時

会場：江戸川区総合区民ホール 5F 小ホール（東京都江戸川区：都営新宿線船堀駅前）

産業技術総合研究所活断層研究センターでは「第2回活断層研究センター研究発表会－活断層評価手法の高度化にむけて－」を下記のように開催します。

当センターでは、平成15年度末までに全国の主要起震断層に関する調査研究成果をとりまとめたデータベースを構築し、断層の活動性に関する学術的な長期予測を行うことを計画しています。今回の研究発表会では、多重セグメント地震を基本としたカスケードモデル等の最新の知見に基づいた活断層評価手法（試案）を提案するとともに、評価のためのデータベースの基本構造と評価手法の適用事例を紹介いたします。また、長大活断層の活動様式に関する最近の研究事例をとりあげて、その評価手法と強震動予測に関する問題点を検討します。

■プログラム（予定）

10:00～	活断層研究センターにおける活断層評価について	佃 栄吉
10:20～	断層活動モデルの高度化と活断層評価手法	栗田泰夫
11:00～	活断層評価のための活断層データベース	吉岡敏和
11:30～	断層活動モデルと強震動予測について	関口春子
13:00～	ポスター発表：活断層研究センターにおける平成14年度の研究成果	
14:00～	糸静線活断層系における事例と目的を限定した評価基準について（仮題）	三浦大助 （電中研）
14:30～	北アナトリア断層の調査結果～多重セグメント地震の調査事例（仮題）	奥村晃史 （広島大）
15:00～	地震調査推進本部における活断層の長期評価の現状（仮題）	島崎邦彦 （東大地震研）
15:30～	パネルディスカッション：活断層評価手法の高度化に向けて パネラー：島崎邦彦、奥村晃史、井上大栄（電中研）、鈴木康弘（愛知県立大）、佐藤俊明（清水建設）、佃 栄吉、栗田泰夫、吉岡敏和	

※ 事前の参加登録・予約等は不要です。お早めに会場にお越し下さい（9時30分開場予定）。

問い合わせ先

活断層研究センター 栗田泰夫・吉岡敏和

E-mail : awata-y@aist.go.jp, yoshioka-t@aist.go.jp

Tel : 029-861-3823, 2465 / Fax : 029-861-3803

<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>